

日本における白居易の受容に関する研究——二〇二〇・二〇二一年——

下 定 雅 弘

拙文は「日本における白居易の受容に関する研究」の紹介を、二〇二〇年と二〇二二年三月の論著について行う。対象とする研究は、主としてCZに掲載する二〇二〇年以降の、「日本における白居易受容の研究」に関する論著を対象とした。ただし、二〇一九年以前の論著で見落としていたものも取り上げている。文献の配列その他、凡例事項は、『白居易研究講座第七卷』の凡例に準拠し、「白居易研究年報」において、研究の進展に即して新たに設けた分類項目を加えている。

「*」を冠した小字の記述は下定による事項注である。

下定雅弘『白楽天と能』（『梨雲』別冊、葛飾吟社、二〇二一・八）。

「金春月報」の連載稿（解題は後掲）を一つにまとめ、若干手を加えて成ったもの。葛飾吟社代表理事、今田述氏による「はじめに」に、『梨雲』別冊とした理由が記されている。「日本の伝統芸能に白楽天の詩がどう取り入れられたかは、誠に興味深い。能の世界では白楽天は神にされているが、これも日本人の感性の一つだ。これを読み、白楽天の思いを知ることが、私たちの作詩活動に資するところが大きい」。

上野英二『源氏物語と長恨歌 世界文学の生成』（岩波書店、二〇二二・二）。

↓は、すでに『白居易研究講座』七あるいは「白居易研究年報」に紹介されていることを示す。

序論 「長恨歌」から源氏物語へ（『国語国文』五〇巻九号、一九八一、初出）↓『白居易研究講座 七』（勉誠社、一九九八・八）

其一 楊貴妃の例（『成城国文学論集』三五、二〇一三。現代「事の忌み」）↓「白居易研究年報」二〇（勉誠出版、二〇二〇・九）

其二 光源氏始末 其三 長恨歌変奏（同三六、二〇一四）↓同上

其四 竹取と浦島 其五 羽衣説話（同三七、二〇一五）↓同上

其六 天の夕顔（同三八、二〇一六）↓同上。

其七 源氏物語と白鳥処女（同三九、二〇一七）↓同上

其八 長き世の恨み（同四〇、二〇一八）↓同上

其九 長恨歌と桐壺の巻（同四一、二〇一九）↓同上

其十 長恨三代（同四二、二〇二〇）

其十一 女のしわざ（同四三、二〇二二）

其十二 白居易処女説話再考（未発表）

其十三 雨夜の物語（未発表）

其十四 尋ねゆくもがな（未発表）

其十五 夢の浮橋（未発表）

補論 長恨歌の民話的原型——羽衣・浦島・七夕説話（『文学』一七巻四号、岩波書店、二〇一六）↓「白居易研究年報」二〇（勉誠出版、二〇二〇・九）

「其十 長恨三代」。「長恨三代」とは、桐壺帝・光源氏・薫三代の「長恨」を指す。源氏の多情が、結局は葵上を死へ追いやった。紫上の死に葵上の死を重ねて描くことで『源氏物語』（以下、『物語』と略すことがある）は、源氏の失態を浮かび上がらせようとしたのではないか。結局のところ、桐壺帝も光源氏も、最愛の女性に先立たれ、無惨にも「うち捨てられ」という結末に陥ることとなる。罪深きは男。その点においては、源氏の衣鉢を継ぐ薫、宇治十帖のヒーローたる薫もまた、変わるところはなかった。『物語』においては、父も、その子も、さらにその子も、女君を失って「長恨」を久しうするばかりなのであった。

「其十一 女のしわざ」。桐壺帝・光源氏・薫。『物語』において女君に去られた男達は、いずれも悲嘆の淵に置き去りにされ、ただただ「惑ふ」ばかりだった。対して去り行く女君達は、それぞれの状況においてそれぞれに個性的である。桐壺更衣は、渦巻く嫉妬の中を気なげに耐えようとして病に倒れた。藤壺は、源氏の激しい思慕、不義の子の出産に苦悩しつつも、出家の道を択ぶことで、源氏を協力者として冷泉帝を守り抜いた。紫上は、源氏の正妻格とされながら、源氏の多情に悩まされ、特に女三宮の降嫁後は、嫉妬と身の処し方に悩み、出家の

意志を堅めつつあるところで発病、死に至った。浮舟は、優柔不断な薫、そして熱情一途の勾宮との間で煩悶、自ら死を思い立ち、失踪、継いで出家の思いを遂げた。

『物語』の女君達の物語は、男君達の羈絆に悩み、そこからの離脱を企てようとする物語であった。それは男性への「不信感」に根ざすものだろう。そして女君達は、次第にその主体性を強めて行き、ついにそれは男性への「抵抗」から離脱し、拒絶に至る。

『源氏物語』以前、物語は女性の愛好のうちにあつたが、その創作はおおむね男性の手の内にあつた。物語の歴史において、『源氏物語』の出現は、女の物語の誕生という意味において革命的な事件だった。

「其十二 白鳥処女説話再考」。白鳥処女説話とは、自在に飛翔する美しい白鳥の姿に託しつつ、人間の男女の結婚と、その破綻とを語ることを眼目とする、一連の物語だった。それは、人類普遍の根源的な物語である。

「長恨歌」は、ことにその前半は、この人類普遍の根源的な物語、白鳥処女説話に則った物語だった。「長恨歌」は白楽天一人の独創によるものではなくて、その土壌となった豊かな民話の世界があつた。その民話を育んだ人々は、白鳥処女説話に魅了されていた。『源氏物語』の前には、太古以来の白鳥処女説話の流れと、その集大成たる「長恨歌」が世界に冠たる大文学として聳え立っていた。しかしそれらは徹頭徹尾、男による、男の文学だった。

白鳥処女説話は、男の女に対する暴力性にも拘わらず、去って行った女の美しさが嘆賞される。だが、限りない哀切を嘯みしめるというのもまた、男の一方的な願望だったのである。白鳥処女説話以来の男の一方的な願望の物語に、『源氏物語』は不信感を抱き、抵抗を試みたのである。その最大の敵が、当時大流行の「長恨歌」だった。難敵を相手にすることで、『源氏物語』は自らを鍛え、それを克服して、新しい、女による、女の文学、『源氏物語』を創出した。男の物語から、女の物語へ。それは人類文学史上の、一大転回だった。こうして『源

氏物語』は、一躍、世界文学となったのである。

「其十三 雨夜の物語」。『源氏物語』の時代、女が男の元を去って行くという話は物語の典型だった。『竹取物語』しかり、「長恨歌」しかり。

しかし『源氏物語』は、そうした物語に対してすでに批判的な眼差しを向けている。男の気まぐれを拒否し、決然と去って行く空蟬。取り残されて手を拱くばかりの光源氏。同じく女が男の元を去って行く話ではあつても、『源氏物語』にあつては、その女君達は苦悩し、意志し、行動する。そうした女性の主体性こそ、『源氏物語』がそれまでの物語に対して独自性を発揮する点である。

『源氏物語』で出家し男の元を去って行く女性達は、熟慮の末に出家を遂げ、その覚悟は揺るぎないものだった。それは光源氏や薫が出家を想いながらも逡巡し、ついに実行に至らなかつたとは較べようもないものだった。「雨夜の品定め」で語られた、左馬頭による「指食いの女」、嫉妬深い女の話や、頭中将による「常夏の女」、内気な女の話は、「婦女子」を喜ばせる類の、甘美な感傷の物語ではない。従来の物語と『源氏物語』を分かつものは、「現実の生身の人間そのもの」への関心ということだ。「雨夜の品定め」は女を語る男を、女が語っている。「源氏物語」は男女を往還して自在だった。こうして『源氏物語』は「現実の生身の人間そのもの」を描く「写実」的なものへと歩を進めた。

其十四「尋ね行く幻もがな」。『源氏物語』は、女に去られた男が、女に会うことのできない哀切を描く物語である。

白鳥処女説話には「失った妻を捜しに行く男」と呼ばれる話が続くことが少なくない。女に去られた天人女房説話の男達は、なんとか妻を追って天へ昇ろうとした。それに骨格を等しくする「長恨歌」の物語では、後半部分、方士の蓬萊訪問の部分が、「失った妻を捜しに行く男」の話に相当する。

いずれにしても、白鳥処女説話においては、女に去られた男の喪失感、未練の気持ちが、何らかの形で展開される。民話にしても、「長恨歌」にしても、その「妻探索行」はひとまずは成功して、男はあるいはその使いは、女との再会を曲がりなりにも果たすことができた。

しかし『源氏物語』にその成功は無かった。なぜなら、『源氏物語』において、男の元を去った女君達は、多くは死別。生別の場合でも、出家その他、再会は固く拒まれたからである。『源氏物語』には、民話や「長恨歌」の描くようなロマンチックな展開はあり得なかつたのである。桐壺の巻に「尋ね行く幻もなつてにても魂のありかをそこと知るべく」という。「長恨歌」の「幻」は『源氏物語』においては、文字通り、幻の存在でしかなかった。

「其十五 夢の浮橋」。『源氏物語』終章の「夢の浮橋」とは、河などに架ける船橋の浮橋ではなく、日本古来の神話的想像の「天の浮橋」だ。^{*}

^{*}主に、益田勝実「夢の浮橋再説」(日本文学誌要)四〇、一九八九・二二)に拠る。

それは天人女房説話・白鳥処女説話、また「長恨歌」等の「妻探索行」と同様のものである。『源氏物語』は、陰に陽に「長恨歌」を踏まえながら、「長恨歌」による物語を語り続けた。それは天人女房説話・白鳥処女説話を語り続けたことに他ならない。いずれも、女は男の元を去って行った。そして男の側からは常に去って行った女へ、思いが寄せられた。男達は何らかの「はし」を、去って行った女のもとへ架けようとした。しかしそれは成功に至らなかつた。そして、その「はし」も、女の側から断たれる時が来た。「夢の浮橋」という「はし」の途絶えとともに、『源氏物語』という物語も途絶えるのである。

「後記」について。高校時代に桐壺の巻を通読した時の感動に始まり、前著『源氏物語序説』(平凡社、一九九五、京大での集中講義(二九九八)を経て、本書の刊行に至る、著者の『源氏物語』への関わり方を述べる。その最後の部分。

物語の歴史とは、人類全体の何か根源的なものの、自己運動の連続とでもいうべきものと思える。『源氏物語』に導かれるままに、『源氏物語』から「長恨歌」に溯り、その根底に民話の原型のあることを見出したとき、その底に広がっていた荘嚴な世界の美しさに、思わず息を呑んだ覚えがある。あたかもそれは夜空に輝く銀河のきらめきを見る思いだった。本書は、『源氏物語』と「長恨歌」を巡って、その語る声に心を傾け、それを身に観じて聴き取ったところを綴ったレポートである。このレポート、紫式部は、どのように納受してくれるだろうか。無論、天空に應える声のあろうはずがない。桐壺の巻のあの歌を繰り返す他ないだろう。尋ね行く幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく

二の二七 慶滋保胤

吉原浩人「慶滋保胤勸学会詩序考——白居易との関連を中心に——」(『海を渡る天台文化』、勉誠出版、二〇〇八・一二)。

『海を渡る天台文化』第三部『天台文化と貴顕の文章表現』所収。天台僧と大学寮学生が集った勸学会で作成された慶滋保胤の詩序を分析しつつ、白居易詩文が日本においていかなる宗教的意味を持っていたのかを明らかにしている(吉原の本書「はじめに」)。後掲『本朝文粹』の詩序……(二九六六)が勸学会の詩序の全体像について論じたものを吸収しつつ、詳細な訳注を行う第一回の試み(二「はじめに」)。

二「勸学会の概略」。勸学会の一員源為憲の「比叡坂本勸学会」の全文を資料として勸学会の概要を記し、白居易の詩文から「贈僧五首、鉢塔院如大師」2804・「香山寺白氏洛中集記」3608・「遣遥詠」0577を引くことを述べる。

三「慶滋保胤の勸学会詩と詩序訳注」。慶滋保胤の詩序の原文を示し、文章構造・訓読・現代語訳・注釈を

記す。

「四 勸学会詩序の内容と表現の特色」。以下の節を立てる。「1 『法華経』と浄土教」「2 見仏聞法と風月詩酒をめぐる」」「3 勸学会句題詩の構造」「4 詩序の構成と破題」「5 白居易に託したもの」。第2節にいう。童子の戯れでさえも成仏できるのなら、勸学会が風月詩酒の楽遊であつても、白居易のいうようにその誤りを転じて菩提の種とすることができる。保胤は両者を対立軸として捉えているのではなく、止揚している。第5節にいう。保胤は、詩序の結びに、天台智顛の事跡を持ち出すことにより、語らずとも勸学会で作成した狂言綺語を讃仏乗の因に転じたい（香山寺白氏洛中集記に述べられている）という意志を示している。

「五 結語」。保胤は、この詩と詩序を作成する際、『法華経』・浄土経典・白居易の詩文から、多くの語彙を使用すると決意していたことが、出典検証の結果読み取れる。

吉原浩人「慶滋保胤「何処堪避暑詩序」訳註——白居易詩文撰取の方法（一）——」（日本思想文化研究）第二巻一号「通巻第三号」、二〇〇九・一）。

冒頭の「要旨」にいう。本稿は慶滋保胤がどのように白居易の詩文を撰取したか、その方法を明らかにするために、「何処堪避暑」詩序の訳註を行い、その典拠を一々検証した。結果、保胤は意図的に白居易の詩文から言葉を選び、詩序を撰述したことが明らかになった。章立ては以下の通り。「一 はじめに」。「二、慶滋保胤「何処堪避暑」詩序訳註」。「三、「何処堪避暑」詩序の方法」。「何処堪避暑」詩序の破題」「五、結語」。

三章にいう。本作は、詩題が白詩「何処堪避暑」3036から取っているのもとより、序の語は、八月・九月を始めとして、一般に使用する語彙ばかりである。これらは「何処堪避暑」の他に、「草堂記」1472と『千載佳句』所収の白詩等による所が大きい。

四章にいう。一般の詩序は、第二段で句題の敷衍を行うが、この詩序は短いため、「何処堪避暑」を冒頭から題目・破題・本文と展開させている。題目では句題の五文字を全て使用しなければならぬが、最初の隔句対で用いた後、それは河陽館の勝境であり、源相公の別第だと同じ場所を言い換えてくり返す。この部分は、句題の典拠となる白詩「何処堪避暑」と『千載佳句』に収載される白詩「妓樂」1063を下敷きにして、白居易が廬山山中に営んだ涼しげな草堂を、源相公と重ね合わせている。ここでは「草堂記」を下敷きにして、白居易が廬山山中に営んだ涼しげな草堂を、源相公と重ね合わせている。本文では譬喩を用いて句題を展開する。どこで暑さを逃れるかといえ、床を移し長椅子を連れ、木蔭で横になって休むところである。（何処）またそこは、さつと涼しい風が吹いて、八月か九月の秋のように、暑さを避けて堪えることができる。（堪避暑）これらは草堂記に「日光不到地、盛夏風氣、如八九月時。下鋪白石、為出入道」などとあることに想を得たもので、さらに他の白居易の作品を参照したものである。

「五、結語」にいう。この詩序は、強い意志を持って数多くの白居易の詩文から言葉を選んでいく。この傾向は他の作品からも窺える。勸学会の詩序もそうだが、「晩秋過參州藥王寺有感」詩序にも同様の目的が見て取れる。

吉原浩人「晩秋過參州藥王寺有感」詩序訳註——白居易詩文撰取の方法（二）——」（水門——言葉と歴史——）二一、二〇〇九・四）。

慶滋保胤の白居易詩文の操作方法をめぐって論じた「慶滋保胤勸学会詩序考……」（二〇〇八・一二）、「慶滋保胤「何処堪避暑」詩序訳註……」（二〇〇九・一）に続き、小品の中にも、いかに白居易への敬慕がこめられているかを検討する。（一 はじめに）。章立ては以下の通り。「一 慶滋保胤「晩秋過參州藥王寺有感」詩序訳註」「二 慶滋保胤の地方巡歴」「四 「晩秋過參州藥王寺有感」の方法」「五 結語」。

三章にいう。大江匡房は、『続本朝往生伝』の慶滋保胤伝の中で、出家後の保胤が「諸国を巡歴して広く仏寺

を作した」というが、その資料は少ない。本詩序は、出家後の保胤の行動の一端を伝える貴重な作品である。

四章にいう。わずかに百五字の作品だが、出典の多くは白居易の詩文に基づいている。その主なものは、『千載佳句』に載る「秋池2852・「初冬」2443・「別山居」1096・「菊酒」3776と「池上篇」2928・「草堂記」1472・「送毛仙翁」3546・「遊悟真寺詩」0264・「香山寺新修経蔵堂記」3607である。要するに、白居易が江州に貶謫され、廬山の草堂で仏教に心を寄せていた時期のもの、あるいは長安や洛陽の寺院を詠じた詩文から取られているものが多い。旅の途次にある保胤は、立ち寄った行基創建の薬王寺を、白居易ゆかりの廬山草堂や悟真寺・香山寺等に見たて、そこで詠まれた詩文を意識して語彙を選んだのである。

「五 結語」にいう。慶滋保胤は、これらの作では、白居易の詩文の語句を極力使用しようという意識を持って文章を組み立て、白詩にその語がない場合のみ、他の有名な故事を用いている。これは作品全体を白居易の語で多く尽くそうという、強力な意図によったものである。

吉原浩人「慶滋保胤「春生逐地形」詩序訳註」——白居易詩文撰取の方法(三)——」〔多元文化〕一〇、二〇二一・(一)。

慶滋保胤の白居易詩文の撰取方法についての論「慶滋保胤勸学会詩序考……」〔二〇〇八・一二〕・「慶滋保胤「何処堪避暑」詩序訳註——白居易詩文撰取の方法(二)——」〔二〇〇九・一〕・「慶滋保胤「晚秋過參州薬王寺有感」詩序訳註——白居易詩文撰取の方法(二)——」〔二〇〇九・四〕に続くもの。(一)はじめに)。以下の章を立てる。

「一 本詩序の訳註」「二 本詩序の詩題と典拠」「四 本詩序の破題」「五 本詩序の方法——その一——」「六 本詩序の方法——その二——」「七 中世文學への永享」「八 結語」。

三章にいう。詩は現存しない。詩題は白詩「早春即事」3250の第六句「春水逐地形」をそのまま取ったものである。詩題以外に、この詩の「早春」「北」「梅」「東岸」「柳」等の語を使用している。

「八 結語」にいう。本詩序の主題は、句題に示される通り、年が改まり、全てが新たな生を得た春の歓びを讃えるためのものである。保胤はそのために、まず白詩の一句の含意を読み取り、他の白居易の詩文と『千載佳句』を基本として利用しつつ、さらに『史記』『後漢書』『文選』の故事や、元稹・許渾らの詩を参照して、この作品をまとめた。白詩の語については、『白氏六帖』を踏まえつつ、特に『白氏文集』巻十三「律詩一」所載の早春詩から多くの言葉を選んでいる。

吉原浩人「慶滋保胤の齋然入宋餞別詩序考——白居易・元稹詩文との交響——」〔東アジアの漢籍遺産——奈良を中心として〕、勉誠出版、二〇二一・六。

東大寺齋然ちやうぜんは、永観元年(九八三)に、初めて入宋した僧である。齋然の入宋の際に、慶滋保胤は願文と詩序を撰述している。本稿では、出立の際に撰述された「仲冬餞齋上人赴唐同賦贈以言各文一字」詩序(『本朝文粹』巻九「五二」)について読解し、その表現と心情を探る。この詩序は、入宋前年の十一月に、別離の詩会を設けた際のもの(はじめに)。章立ては以下の通り。「一 詩序訳註」「二 句題」「贈以言」「三 第一段」「別賦」と雁足・鳥頭うづしの故事」「四 第二段・勅命によらない入宋」「五 第三段・贈る言葉」「六 詩・靈山の別れと浄土への希求」「結語」。

「結語」にいう。保胤は勸学会の主要結衆の一人であり、『法華経』と白居易の詩文を作文の柱としていた。だが本詩序では、それら以外に元稹の詩文を利用していたことを明らかにした。特に元白が唱和した詩文のうち、他生すなわち来世での再会を約したものに、保胤が注目していたことが重要。遠い異国に旅立つ齋然とは、この世では二度と会えないかもしれない。しかし現世で仏法を通じて深い交誼を結んでいるからには、前世で釈迦の靈鷲山りやうじゆせん『法華経』説法時の聴衆同士だった南岳慧思と天台智顛のように、後世で再会できるかもしれない、あるいは白居易と元稹らの誓いのように、他生においてもこの世における交誼を記憶して、再会したいと願ったの

二の二二 清少納言

張培華「清少納言と白居易の表現——詩的な心象——」（日本女子大学紀要・人間社会学部、二〇二一・三）。

【要旨】にいう。『枕草子』における『白氏文集』の研究にはすでに多くの論考があるが、まだ幾つかの章段の中に白居易の詩句との関係があることは見出されていない。本稿は次の三つの章段に関わる場面を取り上げて検証する。

一、「正月一日は」の章段のうち、「三月」の「桃の花」、「柳」と「まゆ」の表現。

二、「七月ばかりに、風いたう吹きて」の章段の「扇もうち忘れたるに」の場面。

三、「うつくしきもの」の章段のうち「稚児」が「塵」と遊ぶ場面。

章の設定は以下の通り。「一 はじめに」「二 詩的な心象とイメージ」「三 春の「柳」と「眉」のイメージ」

「四 秋の「雨」と「扇」のイメージ」「五 「稚児」と「塵」のイメージ」「六 おわりに」。

「六 おわりに」にいう。一、「三月三日」の章段における柳の葉のイメージは、「長恨歌」の楊貴妃のような美人の「柳葉眉」と同じ心象であり、二、また「七月ばかりに」の章段の、秋雨の後の涼しい日に扇を使わない場面は、白詩の「雨後秋涼」の詩句のイメージであり、三、さらに「うつくしきもの」の章段の、稚児が塵を見つけて喜び遊ぶ場面は、白詩「観児戯」(203)の幼児の塵遊びのイメージと合致している。清少納言は、白居易の詩的な心象を吸収して、『枕草子』の中でしばしば新しい和の表現を作り出した。

二の二三 源氏物語

岩原真代「末摘花物語と『白氏文集』『上陽白髮人』」（生活文化研究所報告「四七、二〇二〇・三）。

「はじめに」にいう。末摘花の造型に関しては、『白氏文集』のみを見ても「北窓三友」「凶宅」「傷宅」「重賦」等の受容が、検証されている。本稿では、なお、末摘花の長年の辛苦に追い打ちをかける後半生のあり方に、『白氏文集』『上陽白髮人』の引用を確認し、物語における意義を考察する。章立ては以下の通り。「はじめに——二条東院の末摘花——」「一、『源氏物語』と『白氏文集』『上陽白髮人』」「二、末摘花の閨怨「長恨歌」と「上陽白髮人」引用」「おわりに」。

一章にいう。新聞一美氏は末摘花造型に関して「その徹頭徹尾時代遅れの様子はやはり、「上陽白髮人」の「小頭…時世粧」という人に笑われそうな時代遅れの様子を想を得ているのであろう」と示唆された上で、「蓬生」巻に強吏の横暴を嘆く「重賦」の引用を詳述されている。本稿では、なお、上陽人の生が、末摘花物語全般の構想に影響するものと考え、物語に胚胎する諷諭の精神を探る。

* 「源氏物語の女性像と漢詩文——帚木三帖から末摘花・蓬生巻へ——」（『源氏物語と白居易の文学』、和泉書院、二〇〇三）。

二章にいう。末摘花は、六条院から離された地で憂愁を抱え、紫の上らを羨む女君の代表とされる。こうした境遇は、楊貴妃に疎まれ、上陽宮に幽閉された上陽人の辛苦の境遇を踏まえているだろう。古代の装束への執着・閨怨の情、そしてそれを笑う周辺人物の存在もまた、「上陽白髮人」との共通点である。

白詩引用によって、物語における末摘花はどのような位置づけがなされているのか。「待つ女」から「恨む女」へ——末摘花の後半生は、光源氏との関係を軸に女性苦を体現したものになっている。上陽人の辛苦が末摘花に

投影されるとすれば、玄宗皇帝は光源氏に、上陽人を陥れた楊貴妃は、紫の上をはじめとする六条院の時めく女君たちに相当する。ここには擬似的な後宮の姿がある。末摘花という、空聞を託つ典型的な女君を描く意義の一つには、六条院体制の確立とその陰の部分語る意味がある。

「おわりに」にいう。末摘花の辛苦は、六条院の外部にありながら、内部の女君の生の危うさをも暗示している。「初音」巻に見られる末摘花の経年劣化の姿は、紫の上を中心に、玉鬘を迎えて若やぐ六条院体制にも必ず訪れる、「老い」と闘怨の主題を先取りし、実像をもって突きつけている。

二の二六 本朝麗藻・本朝文粹

吉原浩人『本朝文粹』の詩序と『法華経』——勸学会詩序を中心に——（国文学 解釈と鑑賞 第六一巻一二号、一九九六・二二）。

一、『本朝文粹』巻八〇十一には、詩序一三九首が収載されているが、うち『法華経』の名を明記するのは以下の五首。①慶滋保胤「暮春於六波羅蜜寺供花会聴講法華経同賦一称南無陀仏詩序」、②「暮秋勸学会於禪林寺聴講法華経同賦聚沙為仏塔詩序」、③紀齊名「暮春勸学会聴講法華経同賦撰念山林詩序」、④高階積善「暮秋勸学会於法興院聴講法華経同賦世尊大恩詩序」、⑤大江以言「九月十五日於予州楠本道場擬勸学会聴講法華経同賦寿命不可量詩序」。以下、本稿の白居易に関わる記述の一部。

③の詩序には、「先ず経を講じて後に詩を言い、信心を内にして綺語を外にす」とあり、『法華経』を講じた後に詩を詠ずる行為は、信心を内に保ちながら綺語を外に向かつて発するものだ、という。ここには、文学的営為は「狂言綺語」の謗りを免れないという気持ちが現れている。だが一方で『法華経』の教理を詩文に詠むのは、仏道に近づける方法だった。そこで齊名は序の最後に「請うらくは宿習の文章を課し、将来世の張本と為

さんと、爾か云う」と詩序を結ぶ。作文は「宿習」として捉えられている。それは、過去世から続く深い煩惱の業である。だがそれは、来世においては往生極楽のための善根へと転化される可能性を持つ。この部分は白居易の『六讚偈序』392を踏まえている。『六讚偈序』で、白居易は、仏法僧の三宝と衆生を讃え、懺悔・発願する六首の偈文が、来世の張本とならんことを祈請する。^{*} 齊名はこの白居易に自らを重ねている。撰関期を代表する文人たちは、白居易の言辞を媒介に、『法華経』を聴講し、『法華経』の教えを詩に敷衍することで、自らの文学的営為を正当化したのである。

^{*}「六讚偈」序の全文。「棄天常に願有り。願わくは今生世俗文筆の因を以て、飄りて来世讚仏乘・転宝輪の縁と為すなり。今年七十に登りて、老いたり病みたり、来世と相い去ること甚だ邇し。故に六偈を作り、跪きて仏・法・僧の前に唱え、以て因を起し縁を發して、来世の張本と為さんと欲するなり」。

三の二四 謡曲・白楽天

下定雅弘「白楽天と能(第二回) 人生の實事は是れ歎娯」(金春月報 四二二二、二〇二二・二二)。

能における白居易の受容について、二〇二一年上半期連載稿を記すにあたり、まず「白居易の人生と生き方について、読者と理解を共有しておきたい」として、以下の節を立てて概要を述べる。「姓名」「略歴」「兼濟と独善」「憂いを少なく歎喜を多く」。

下定雅弘「白楽天と能(第二回) 『白氏文集』の成立と伝来」(金春月報 四二二三、二〇二二・二三)。

標題の問題について、以下の節を立てて概要を述べる。「一、『白氏文集』の成立と伝来」(『文集』の成立・『文集』の後裔・日本への伝来、「二、『白氏文集』の受容」(能成立期前までの受容につき、主な分野別に概況を述べる。

【平安時代】漢詩・和歌・物語・女流への影響・文。【鎌倉時代・南北朝】和歌・軍記・随筆・文。【小結】に

いう。行文の平明・日常の事象に即した内容への親密感・四季の変化に対する情感の近似・地位の高さ等が、平安の貴族・鎌倉の教養人の心を捉えた理由だったろう。そして、全作品の根底にある強い自愛心とそれを生きとし生けるものの全てに及ぼす共生の思想、これらが以後どの時代にあっても白居易が敬慕され続けた主な原因である。

下定雅弘『白楽天と能(第三回) 謡曲『白楽天』』（金春月報）四二一四、二〇二一・四。

謡曲『白楽天』について、以下の節を立てて論じる。「一、『白楽天』の概要」「二、日本における『白楽天』像の形成」「三、白居易の詩文の受容」「四、政治的寓意説について」「五、構成についての疑問」。

第二節。白楽天が唐土の詩と仏教とを代表する偉大な存在であることが、『白楽天』の筋立ての前提になっている。島田忠臣・都良香・慶滋保胤等の白居易への敬慕があり、また白居易が文殊菩薩の化身だとする考えが平安中期からあった。

第三節。白居易の詩文自体の受容は「酒功讚」「海漫漫」の一部から等、わずか。

第四節。『白楽天』は単なる詩歌の争いではなく、「応永の外寇」を頭に置いての政治的寓意を託した作だとの説がある。政治的寓意説は斯界の少数派のようだが、なお検討の必要がありそうだ。

第五節。『白楽天』全体の構成は、主要部である前シテとワキとの問答（詩と歌の応酬）の場面と、集結部である後ジテ（住吉明神）が軍神として登場する場面とに齟齬がある。中入でのアイ（末社の神）の「シャベリ」によれば、楽天は漁翁の言葉に驚き、日本の智慧を計ることなど思いも寄らず、急ぎ帰国しようとして述べている。終結部、白楽天は自ら帰るはずなのに、住吉明神等の舞が起す神風によって、白楽天の乗った唐舟は吹き戻される。もし中入がなければ、白楽天の漁翁の対応への受け止め方は不明瞭なままに、終結部の唐への吹き戻しになる。このほうが齟齬の度合いは低い。主要部と終結部との齟齬の背景に、上述の政治的意義があるかもしれない。この

問題はさらに究明の余地がある。

三の一五 謡曲・楊貴妃その他

三宅晶子『三五夜中新月色 二千里外故人心』をめぐって——白楽天と紫式部と世阿弥と禅竹——」（横浜国

大國語研究）三七、二〇一九・三。

「はじめに」にいう。日本文学は引用の文学といっても過言ではない。引用の典型例として本稿では白詩の一部「三五夜中新月色、二千里外故人心」を取り上げ、自由な解釈がなされている実態を示したい。章立ては以下の通り。「一 世阿弥作能〈融〉」「二 和漢朗詠集』卷上 秋 十五夜付月」「三 『白氏文集』卷十四 律詩」「四 『源氏物語』須磨巻とその影響力」「五 『和漢朗詠集』注釈の世界」「六 白く輝く十五夜の月」「徒然草』一三七段」「八 能における用いられ方」「おわりに」。

論の要点。『源氏物語』『和漢朗詠集』、禅竹作を始めとする謡曲の引用例を検討するに、日本ではこれを原詩の全体から切り離して、二句だけ独立して鑑賞し、澄み渡った夜空を照らす名月は、日本中どこでも同じように見えると考えてきた、その始まりである平安時代の貴族達のセンスに感歎する。

下定雅弘『白楽天と能(第四回) 楊貴妃』』（金春月報）四二一五、二〇二一・五。

『楊貴妃』は、日本において「長恨歌」「長恨歌伝」に基づく玄宗・楊貴妃説話を劇化した最も早い作品である。以下の節を立てる。「一、「長恨歌」の構成と主題」「二、『楊貴妃』——その直接の来源としての「長恨歌序」「三、霓裳羽衣曲」。

「二」。「楊貴妃」以前、玄宗が方士を遣わして、楊貴妃を尋ねる物語は、『俊頼髓脳』『今昔物語』『唐物語』等に見えるが、以上のどれよりも『楊貴妃』の構成に近いのが、おそらく日本人の手になる「長恨歌序」である。

その理由。第一、「序」も「歌」も、仙界譚の部分だけ、ほとんど方士とやりとりする楊貴妃の言葉と振るまいで構成されている。第二、「序」では楊貴妃は積極的な愛の告白者である。『楊貴妃』の玉妃も、「序」の「長く恨む者は楊貴妃なり」をそのまま継承している。第三、語句にも類似が見られる。異なる点。「序」は「長恨歌」のこの部分の貴妃の言動の描写をほぼ引き継いでいる。『楊貴妃』も玄宗を愛するのは「序」と同じだが、単純ではない。玄宗との愛の日々への甘美な回憶と、曾ての日々を取り戻すことのできない悲嘆の間で揺れ動いている。

「三二」。「楊貴妃」の霓裳羽衣の舞は、白居易「霓裳羽衣歌」が伝えてくれる実際の霓裳羽衣の舞とは違う。仏教思想に基づきつつ、人生の虚無を慨嘆し、老少不定・会者定離の理を強調し、ヒロインの恋つつも恨むという矛盾した感情を表現している。舞は終始、胸底の激しい葛藤を潜めつつ静かに舞われていく。『楊貴妃』の霓裳羽衣の舞は作者の創案になるものである。

下定雅弘「白楽天と能(第五回)『皇帝』」(金春月報 四二一六、二〇二一・六)。

『皇帝』は、観世信光の作とされる。『皇帝』というも、鍾馗が玄宗を助けて楊貴妃に取り憑く病鬼を退治する話である。以下の節を立てて論じる。「一、鍾馗靈験譚」「二、謡曲『鍾馗』」「三、「長恨歌」「四、李夫人」。

「二」。中国での鍾馗の靈験譚は、大中年間の盧子撰と伝えられる『唐逸史』、北宋・沈括『夢溪筆談』、『事物紀原』等に見える。筋立てははずれもほぼ同じで、瘡を患った明皇を、夢に現れた鍾馗が治すという話である。日本での鍾馗の記事は鎌倉時代になった『地獄草紙』乙本や、文安二、三年成立の『壺囊鈔』等に見える。鍾馗靈験譚は、日本につたわってからも増補はない。鍾馗が貴妃にとりつく病鬼を退治するという筋立ては『皇帝』の作者の創出だろう。

「二二」。「皇帝」と同じく鍾馗を主人公にした謡曲に、金春禪竹の『鍾馗』がある。『鍾馗』は、『唐逸史』等の原話の、宮中での鍾馗の靈力・勇壯を、天地を舞台としてさらに広大で躍動感のあるものに仕上げている。禪竹も信光も、『皇帝』と国のために悪を滅ぼす鍾馗の威風堂々たる様を表現している。『皇帝』は、鍾馗を主役としつつ、玄宗が楊貴妃の病を治そうと奮闘する場面を導入した。高貴な身分層にも好まれるように、楊貴妃を愛し、病鬼に怯まず立ち向かう意志の強い人物として玄宗を描出したのだろう。

「三二」。「皇帝」は「長恨歌」の語句を、「春従春遊夜専夜」「後宮華麗三千人、三千寵愛在一身」等、本意に問わず随処で自在に用いている。

「四」。「皇帝」の構想には、武帝が李夫人の帰らぬことを悲しむ逸話が関係している。これを玄宗の楊貴妃への愛に重ねたのは白居易である。道具立ても「李夫人」にヒントを得ている。「李夫人」では方士が調査した「反魂香」が、李夫人の魂を呼び出す道具になっている。『皇帝』では、「明皇鏡」が鍾馗登場のお膳立てになっている。『皇帝』は『唐逸史』等の原話の、鍾馗が玄宗の病を治すために神通力を發揮する筋立てに、「長恨歌」と「李夫人」の貴妃をこよなく愛する玄宗を導入した。そしてそれは尽きぬ「長恨」に悲苦する玄宗ではなく、鍾馗の神通力の援けを得て、貴妃への強い愛を示す玄宗である。こうして『皇帝』は、鍾馗と玄宗皇帝を一体化して、両者の英雄性と躍動感を高めた。

下定雅弘「白楽天と能(第六回)『花筐』」(金春月報 四二一七、二〇二一・七)。

主に『花筐』における新楽府「李夫人」の受容について述べる。曲中、照日の前は天皇の宣旨により、李夫人の曲舞を語り舞いつつ、漢王の李夫人への思慕を我が身の上にとぐえる。狂女のシテはなぜ「李夫人」による曲舞を演じたのか。大谷節子という、「自らの恋慕の激しさと、それ故に恩愛に感う苦しみを吐露したものであり、恩愛故に物狂いとなったことへの理解を李夫人の曲舞に託したと考えるのが、最も相応しいのではないだろうか」*。照日の前は、愛する女を喪った武帝と玄宗の尽きることのない悲痛を、我が身のこととして表現したので

ある。

*「能〔花筐〕と〔李夫人の曲舞〕(白居易研究年報)二〇、二〇二〇・九)。

「李夫人」では「人は木石に非ず」の「人」は男だが、世阿弥はこの男女の枠を取っ払った。「掛ヶ合」に「かれこれ共に時に逢ふ」というのは、「李夫人」の結句「如かず傾城の色に遇わざるに」を頭に置いている。「かれこれ」——照日の前と皇子——とは、出会ってしまったのである。「花筐」は「長恨歌」と「長恨歌伝」の一部をも組みこんでいる。「花筐」は、「長恨歌」で王妃が方士に渡した「鈿合金釵」だ。

村上瀧「心ごころの花く能ものがたり十二ヶ月 その四(狸々)——酒興の遊舞・白居易の文雅」(茶道雑誌 八五(二二)、二〇二一・一二)。

冒頭「能(狸々)のあらずじ」。唐土・金山の麓に住む高風は、親孝行の功德か、不思議な夢を見る。「揚子の市で酒を売れば富貴となること疑いない」。夢告どおりになると商売は当たり前。その店をたびたび訪れる客がある。並外れた酒豪で何杯飲んでも面色は変わらず、「海中に住む狸々」と名のつて消えた。高風は壺に美酒を湛え、その再来を待ち受ける。月や星が美しく輝く、潯陽江の秋の夜。波間から現れた狸々は気持ちよく盃を重ね、舞い興ずると、高風の素直な心を誉めて、永遠に尽きぬ酒壺を与えるのだった。

能(狸々)が「琵琶行」の影響を受けていることを、以下のように述べる。「……変幻きわまりない琵琶の演奏をこれほど精彩ある表現で綴りつつ、全体に人の世の哀感を濃厚に湛えた筆致はなんとすばらしいのですが、実は(狸々)にそうした影響はあまり関係ありません。能に影響を与えているのは「潯陽江の秋」という舞台設定と、作者・白居易のそれ自体です」。「想像上の奇獣と、歴代最高の大詩人と、……両者をつなぐのが「酒」でした」。「李白と同様、白居易もまた後世の人々から、深く酒興を愛する酒仙詩人と認識されていたのです」。「舞台にはまずワキ・高風が登場し、夢告による盛運と、狸々の再訪を待つまでの事情を語ります。……高風が待ち

受けるうち、のどかな囃子事「下がり端」につれて幕が上がり、白足袋以外は全身これ緋色づくめの扮装でシテ・狸々が登場します。……このあとシテは「中の舞」を舞います。……舞い留めるまで通常は三十分。……簡潔な祝賀曲ですので、一年の納めとしてしばしば歳末に演じられる曲でもあります」。「ちなみに舞を舞う狸々が「客人もご覧ずらん」と謡う「客人」を「高風、または同伴の狸々仲間」と解しがちですが、それは違います。白居易は晩年に宮廷で重用され、皇太子の補導役「太子賓客」の栄職にありました。「まれば」とはこの「賓客」の寓意。……酔った狸々は「この潯陽江に縁のある酒好きの太子賓客・白居易さんも、どこかご覧になっています」と戯れているわけで、能の文雅はこのような細部にまで周到に仕組まれているのです」。

二の三四 中古・その他

芳賀紀雄「家持の雪月梅花を詠む歌」(『森野宗明教授退官記念論集 言語・文学・国語教育』一九九四・一〇。『万葉集』における中国文学の受容)「摘書房、二〇〇三・一〇」所収)は、「雪」「月」「梅花」の組み合わせの成立の背景について論じる。家持のこの表現は、白居易の「雪月花」に先んずる、類似表現としてつとに知られている。本稿の結論部分の要点を記しておく*。

*白居易の影響についての論考を扱う本シリーズに、上代の分類項目はない。便宜、本稿の要点紹介をここに配する。

『万葉集』巻十八に、天平勝宝元年(七四九)の作として、家持の次の一首が収録されている。「宴席詠 雪月梅花歌一首 雪のうへに照れる月夜に梅の花折りて送らむはしき子もがも(四一三四) 右一首、十二月大伴宿禰家持作」。

三章にいう。家持の時代より前、中国において梁の頃から、「花」「梅」と「鶯」の取り合わせが固定化しつつあり、『懐風藻』所収釈智蔵の「翫花鶯」や葛野王の「春日翫鶯梅」は、それを前提として受容した結果である。

だから、家持の「宴席詠雪月梅花」の前、すでに花鳥を取り合わせて題とする詩作が行われていた。他方、歌においても、花鳥風月についての詠物歌が繰り返されるなかで、物と物の取り合わせの固定化が進み、詩文の影響を蒙つたと認められる例が少なくない。家持の一首は、その展開から生まれるべくして生まれたものである。梅と雪の取り合わせは、梁簡文帝・陳江総、王筠等に見える。月下の梅の花を詠むことは、『万葉集』において定着していた。月と梅の取り合わせは、中国では梁代からその萌しが窺える。

家持の「宴席……」に到るまでに、歌の方では、雪裏の梅と月下の梅を詠むことはいずれも一般化していた。雪と月の取り合わせは、『万葉集』に先例がない。しかし、詩文の表現を意欲的に撰取する家持の態度を勘案すれば、梁の庾肩吾や初唐の張説の詩に見える「照雪」「照月」などに拠つたとみてよいだろう。家持にとつて、「雪」と「月」、「雪」と「梅の花」、「月と梅の花」というのは、『万葉集』中の先例と詩の表現に基づいて、たやすく取り合わせることが可能だった。のみならず詩において、「雪」「月」「梅花」を、取り合わせることが、唐・太宗や、初唐の陳子昂、宗楚客等によって、すでに行われていた点に注目すべきである。

山田尚子 『中国故事受容論考——古代中世日本における継承と展開——』（勉誠出版、二〇〇九・一〇）。
章立ては以下の通り。

序章。第一部 中国故事の受容と展開。「第一章 拡大する范蠡像——商人と釣翁——」、「第二章 黄帝蚩尤説話の受容と展開」、「第三章 伍子胥と范增——『太平記』巻二十八所引漢楚合戦譚をめぐって——」、「第四章 『唐鏡』考——歴史物語としての側面をめぐって——」。

第二部 中国故事の表現とその背景。「第五章 大江匡房「弁運命論」の表現とその思想」、「第六章 対策の変容——故事と論述——」、「第七章 匡房の後継——『本朝統文粹』所収「述行旅」策をめぐって——」。

第三部 『和漢朗詠集』の表現をめぐって。「第八章 新味と継承——『和漢朗詠集』の故事の表現をめぐって——」、「第九章 『詩序集』の破題表現と『和漢朗詠集』」、「第十章 破題の行方——朗詠註展開の一側面——」。

終章。索引。

序章にいう。中国故事の受容をめぐる問題は多岐にわたる。古代から中世にかけては、『文選』や『白氏文集』等の漢籍の表現及びそれによって製作された日本の漢詩文の表現と密接に関わるものであり、当時の漢詩文のあり方全体を見据える必要がある。日本人が漢詩文製作のために中国から受容し、用いてきた表現についても、故事の場合と同様に、日本で独自の漢語表現が醸成されていく過程を想定しなければならない。白居易に関わる論の要点は以下の通り。

「第一章 拡大する范蠡像」。『史記』『漢書』の貨殖列伝では、范蠡は利殖家だが中古の漢詩文では、出奔後の隠士としての姿が主流。これには、『蒙求』273「仲連蹈海范蠡泛湖」や、白詩の影響が強い。『蒙求』では、范蠡の故事の標題は「仲連蹈海、范蠡泛湖」。魯仲連と范蠡とが権力に背を向けて海や湖に去つた人物として対偶されている。『白氏文集』では、范蠡を用いた故事が六例。いずれも出奔のシーンに焦点を当てており、陶淵明とともに扱われる例が見える。こうした隠士としての范蠡像は、やがて大江匡房「秋日閑居賦」のように、風流や閑居のイメージと結びつく。さらに釣翁（『和漢朗詠集』の古注釈等）・魚商（『太平記』巻四の呉越合戦記事）へとそのイメージを膨らませていく、その様相からは范蠡にまつわる故事の受容が必ずしも権威ある本文に拠るものでなく、流動的なものであることがわかる。同時にその故事への基本的な認識を捨てることなく、その認識と矛盾しない形で范蠡という人物のイメージを膨らませた。

「第三章 伍子胥と范增」。『本朝文粹』『本朝統文粹』等、中古の漢詩文に伍子胥が登場する場合、『史記』の伍子胥列伝や「呉地記」の記事等を典拠として、伍子胥が祭られたという廟やその廟がある江（揚子江）を詠むものであり、生前の忠臣ぶりやその死が国政に与えた影響などが取り上げられることはほとんどない。

漢詩文が伍子胥の廟を詠むことの、より直接的な背景は、『白氏文集』の表現。『白氏文集』には、廟を詠んだものがあり、また諷諭詩に諫臣としての伍子胥を表現したものもある。中古の漢詩文では、同じ『白氏文集』の表現でありながら、諫臣としての伍子胥は受容せず、江岸の伍子胥の聖廟にまつわる表現のみを受容した。^{*}

^{*}この章の解釈について、吉原浩人の書評(後掲)に批判がある。「聖廟」の語は、菅原道真の廟を指す。用例中二例は、大江以言と大江匡房の詩序であり、これらで伍子胥廟に言及するのは、諫言や讒言で非業の死を遂げた、伍子胥と菅原道真の生涯を重ねあわせているからである。また、伍子胥廟のある江を「揚子江」とする。伍子胥廟は各所にあるが、白居易が描くのは杭州銭塘江畔吳山のそれである。

『文鳳抄』において伍子胥が登場するのは、いずれも伍子廟あるいは、伍廟という表現によってである。一方、『管蠡抄』では、臣の用捨が国の興廃を左右する例証として伍子胥を掲げている。『文鳳抄』は作詩のための語彙集であり、『管蠡抄』は君臣の在り方を意識した教訓書であることを考えると、その相違は、漢詩文における問題意識と『太平記』等の軍記物語の問題意識との差異を示すものと考えられる。中古の漢詩文では成立し得なかつた忠心としての伍子胥像が、中世という時代の歴史記述において、為政者による臣の用捨が国の行方を左右する切実な問題として、意識され、積極的に描かれるようになったものだろう。

第七章 大江匡房「弁運命論」の表現とその思想。大江匡房「弁運命論」は、李康「運命論」(『文選』卷五三)の冒頭の句「治乱は運なり、窮達は命なり、貴賤は時なり」と国の存亡や世の治乱に関わる運命を語る句の引用に始まるが、個人の運命への関心に筆を進め、結語の「人命如鴻毛在風」は白詩の閑適詩「聞庾七左降因詠所懷」(242)の「人の大塊の間に生ずる、鴻毛の風に在るが如し」に拠っている。

白居易の閑適詩の吏隠兼得の精神は平安前期から中期にかけて、政治的に不遇な状況にあった匡房を初めてする当時の儒者文人たちの共感を呼び、『白氏文集』が盛んに用いられることになった。一方こうした『白氏文集』の盛行と文章経国思想の後退とが相俟って、『文選』は平安中期には文章規範としての意義を、『白氏文集』に

譲っていた。ところが平安後期になると、『文選』再評価の動きが起こってくる。匡房も文選学を復興しようとする儒者の一人だった。ただ匡房の『文選』に対する思い入れにもかかわらず、最終的に運命を表す表現として用いたのが白居易の閑適詩だったことは、閑適詩の発想がいかに匡房の心情に合致するものだったかを示している。

第八章 新味と継承——『和漢朗詠集』の故事の表現をめぐる——^二『白氏文集』との関わり。『和漢朗詠集』と『白氏文集』とは、同じ故事が同じように用いられている例がかなり多い。例えば袁安や羊祜の故事、王績の醉郷、楊貴妃等は、『白氏文集』にも用例が少なくない。

『和漢朗詠集』の丁令威の故事も、『白氏文集』に拠るもの。その用い方を見るに、『和漢朗詠集』の二例の一つ紀長谷雄372の「華表」は、丁令威の故事が踏まえられているが、「鶴」をいうために、鶴と結びつきの強い華表を用いたにすぎない。『白氏文集』の「微之が春日簡を陽明洞天に投ずるに和す五十韻」261の「華表には双びて鶴を棲ましめ、聯牆には幾つか鳥を点ずる」の「華表」も、洞天のある越の情景を表すのに用いたもので、丁令威の故事との関連性は薄い。

^{*}丁令威が靈虚山で道術を学び、後に鶴と化して故郷遼東に帰り、城門の華表柱(墓前の飾りの柱)にいたという内容。『捜神後記』卷二)

「華亭鶴」の表現についても、『和漢朗詠集』の兼明親王と菅原道真の「華亭」は、陸機の故事の「華亭」とは関係が無く、やはり「鶴」との結びつきの強さから用いられたものである。『白氏文集』の「洛下下居」0378、「求分司東都、寄牛相公十韻」2377の「華亭鶴」は三年間杭州に赴任し、帰洛の際、杭州で著名な華亭の鶴を携えてきたということで、「華亭」は地名として挙げられているに過ぎず、陸機の故事との関連は浅い。

^{*}陸機が誅せられるにあたり、もう一度華亭で聞いた鶴の鳴き声を聴きたいものだと言った故事。(『晋書』卷五四「陸機伝」)

以上のように、『和漢朗詠集』の摘句における故事は、『白氏文集』と共通するものが多く、「華表」や「華亭」といった鶴にまつわる表現に窺えるように、用い方においても共通する点を持つ。

「三 表現の構成」「四 醸成の場」。『和漢朗詠集』に嵇康に関わる表現は四例ある。その一つ、具平親王「柳影繁初合」の「嵇宅晴れを迎えて日月暗し、陸池日を逐いて水煙深し」は句題詩の頸聯(破題)である。この句の「嵇宅」は、『晋書』嵇康伝の「宅中に一樹有りて甚だ茂る」を典拠として、柳が生い茂った嵇康の邸宅を指し、句題の「柳影」を表す。『白氏文集』に用いられる嵇康は、「慵」という表現で恬淡としてあくせくしない人物として用いられるか、あるいは「阮阮」という表現で、阮籍とともに竹林で琴を弾じ酒を飲んで談義する人物として用いられる。『白氏文集』における嵇康は、『和漢朗詠集』のように、柳や松、山や酔といった事柄と関わって用いられることはない。『和漢朗詠集』には『白氏文集』と異なる新たな傾向が確認できる。嵇宅や、陶門、李門といった表現は、『白氏六帖』の記事や白居易の表現に倣いつつ、日本で醸成されたものだろう。それには句題詩における破題表現の深化が大きく寄与している。

「五 匡衡の破題」。日本人によって新たに醸成されたものとして取り上げた『和漢朗詠集』における故事表現の多くが、『江吏部集』に見える。匡衡は、以言や具平親王とともに、村上朝に確立した句題詩詠法を継承し定着させた人物である。

「六 表現の継承」。『和漢朗詠集』の日本詩文における故事の用い方には、『白氏文集』と一致するものと、日本で新たに醸成されたものがあり、後者は『江吏部集』における故事の用い方によく一致する。

『和漢朗詠集』は句題詩の盛行に伴い、破題を作る上で有益な情報を有していることが大きな要因となつて、院政期から鎌倉期にかけて、幼学書としての地位を確立していく。例えば、嵇康の故事は、平安後期以降、柳や松、酒、月の表現として様々なバリエーションで用いられている。こうして、『和漢朗詠集』に収載された故事の表

現は、句題詩の破題を中心に多く用いられ、やがて句題詩製作のための用語集として編纂される『文鳳抄』へと継承されていった。

「第九章 『詩序集』の破題表現と『和漢朗詠集』」五 題材の連関——「擣衣」と「雁」の表現をめぐって。『詩序集』*に、「林霧散じて以て九天忽ちに晴れ、塞雲収まりて以て万里俱に朗らかなるに至りては、旅館に夜深けて夢は断たる村砧処所の響に、戍楼に秋暮れて、膚は驚く松風蕭颯たるの声に、なる者なり」(藤原永範「月下に客衣冷じ」とある。

*平安後期の詩会における詩序詩十六篇を取めたもの。

この「塞雲」という表現は、『和漢朗詠集』の「擣衣曉愁閨月冷、裁持秋寄塞雲寒」(藤原篤茂「風疎砧杵鳴」34)を典拠とし、続く「夢断村砧杵処所之響」も『和漢朗詠集』の「閨寒夢驚、或添孤婦之砧上……」を典拠としており、いずれも擣衣を題材として詠みこむ摘句を典拠としている。『詩序集』の句題は「月下客衣冷」であり、旅人の衣を主題としなければならないが、詩の題材としての擣衣は、辺境に身を置く良人のために衣を擣つ女性の行為であり、行旅と結びつきやすい。「塞雲」の典拠となった篤茂の摘句に「月冷」「寒」とあるなど、どの摘句にも句題と関連する文字が見出される。次いで、雁についての表現を見るに、菅原脩言「雁首催旅情」の詩序に、雁の声と砧の音が和すという発想が見える。この発想には、白居易の「月帯新霜色、砧和遠雁声」321の影響が最も大きいだろう。そして雁と擣衣の取り合わせは、『和漢朗詠集』にも見える。詩序の製作においては、砧・雁、そして松風・鶴・霜などは、辺境のイメージと結びつき、旅人を覚醒させるものとして、互いが互いを連想させる緊密な関係にあった。そしてそうした相互の関係を成立させるのに、『和漢朗詠集』の摘句が大きく寄与している。

吉原浩人「書評・山田尚子著『中国故事受容論考——古代中世日本における継承と展開——』」(説話文学研究)

四六、二〇一・七)にいう。本書は、古代・中世日本文学における、中国故事の受容と展開についての論考を主としたものであり、著者の慶応義塾大学への学位申請論文を主体に三篇の論文を加えている。「本書は、ここ十数年で急速な変化を遂げた、句題詩およびその詩序における破題表現研究の成果に立脚しており、さらにその方法を歴史物語や対策文・朗詠性などに援用したものである」として、一貫している……」。

『第二部第五章では、大江匡房「弁運命論」が『文選』の表現を多く下敷きにするが、白居易の影響も少なからずあることを指摘」する。『第三部第八章では、『和漢朗詠集』と『蒙求』との故事の様態の位相を提起し、『白氏文集』などに倣いつつ、日本で新たに構成された表現の特色について明らかにする」。

山田尚子『重層と連関―続中国故事受容論考』(勉誠出版、二〇一六・三)。

章立ては以下の通り。

序章

第一部 辞表の故事と表現

「第一章 周公旦の故事と摂政」、「第二章 『日本三代実録』貞観八年八月二十二日条所引藤原良房表について——故事の表現と作者」、「第三章 辞表の「鶴」」。

第二部 物語・詩歌の表現とその背景

「第四章 「月宮」の周辺」、「第五章 「龍」の司馬相如」、「第六章 中国故事と和歌―結題の本説の方法をめぐって」。

第三部 故事の継承と再構築

「第七章 楊貴妃譚の変容―延慶本平家物語「楊貴妃被失事」をめぐって」、「第八章 『和漢朗詠註抄』についての再検討」、「第九章 朗詠注の成立と展開―『私注』欄上注への試みを兼ねて」。

「終章」あとがき。初出一覧

序章にいう。本書は平安期の作品を中心として、その表現に中国故事や漢語表現が用いられた場合の有り様をめぐめる問題について考察した九つの論考をまとめたものである。

「重層」について。例えば、「第七章で取り上げた延慶本平家物語の楊貴妃譚は……、『和漢朗詠集』の注釈書、長恨歌、長恨歌伝ほか、新樂府「驪宮高」、同「上陽白髮人」といった複数の典拠が重層的に重ね合わされた上に成り立っている」。

連関について。「如上の重層性は、語彙や表現、故事が互いに関わりを持つ、その結びつき(＝連関)によって支えられている。」「……あるいは白居易の「酔後題李馬二妓」(『白氏文集』巻十五、906)の「雲髻花鈿」「霓裳羽衣」「月中仙」の語を媒介として「月宮」と楊貴妃とが、互いに連想されるもの同士として結びついていたこと(連関していたこと)を想定するとすれば、そうした想定は『竹取物語』という作品そのものの構成や成立に密接に関わる問題となるう」。

第三章「二」「鶴望」「鶴唳」。「鶴望」は、「漢を思ふの士、頸を延ばして鶴望す」(『蜀志』張飛伝)とある。これは漢の景帝の後裔である劉備に対し、漢室を慕う人々がその再興を願っているのを述べたもの。「鶴唳」は、上掲陸機の「華亭鶴唳」に見える語。

『白氏文集』には、「鶴唳」の用例が多く見え、著名なものとして「北亭臥」297の「蓮開きて佳色有り、鶴唳きて凡声無し」がある。これは白居易が北亭に病臥していた際、北亭のあたりの景物を詠んだもの。陸機や白居易の表現からは、「鶴唳」が他の鳥の声とはちがう特別なものと捉えられていたことが窺える。また『白氏文集』や『元氏長慶集』では、「楊柳枝」を歌う妓女の声、琵琶歌を奏する笛の調べを、鶴の声になぞらえている。こうした「鶴望」「鶴唳」の語が、辞表における「鶴」の表現にも用いられている。ところが、辞表では、前

表での辞意が認められなかったことを述べる文脈で、上表者自身を鶴になぞらえ、辞職への決意を「鶴」の語を用いて表すのが常套である。その表現は『毛詩』小雅「鶴鳴」を典拠にしている。『毛詩』「鶴鳴」の「鶴」は、王が見出すべき在野の賢者を喩えている。よって、辞表の「鶴」の造型には、『毛詩』「鶴鳴」の「鶴」、「鶴望」の「鶴」、「鶴唳」の「鶴」、という複数の鶴の造型が互いに結びつき、重層的に影響していることが窺われる。この重層性は、何かを強く願う存在、あるいは願いが叶わないことを嘆く存在としての鶴の造型を、強く印象づけることになったに違いない。鶴が抱く願いや嘆きは、在野の賢人のそれに限るものではなく、願いや嘆きの範囲が拡大して、辞職や退職を願う場合にも「鶴鳴」「鶴唳」の表現が用いられることになったと考えられる。

「三 帰る鶴」。辞表の「鶴」の表現に、「乗軒の鶴老いたり、臯に帰るの望み自ら深し」(大江朝綱「為貞信公請致仕表」)の例がある。「帰臯之望」は、『毛詩』「鶴鳴」の「鶴鳴于九臯」を踏まえ、もとの住処に帰りたい(職を辞したい)という望みを述べたもの。だが、『毛詩』「鶴鳴」は「九臯」で鳴く鶴を詠むのみで、「帰臯」の鶴は描かれていない。「帰臯」は故郷に帰る意を含み、「帰臯之望」には「鶴鳴」「鶴望」「鶴唳」などと比べ、隠遁への志向が強く表されている。『毛詩』「鶴鳴」の「鶴」は在野の賢人を意味するが、鶴はしばしば仙境の鳥、あるいは仙人の乗り物とされる。周の仙人王子喬、前漢元帝の頃、仙人となった三茅君が乗っていたのは白鶴である。鮑照「舞鶴賦」(『文選』卷二四)は、仙界に帰りたいと望む鶴を造型して、こうした仙境の鳥としての鶴の造型に大きく寄与している。「舞鶴賦」と同様の鶴の造型は、白居易や劉禹錫の作品にも見える。例えば、白居易「池鶴二首」其一2674の「風に臨みて一たび唳きて何事をか思ふ、青田を悵望するに雲水遙かなり」は、池のほとりの鶴を仙鶴に見たて、故郷の仙境を恋いつつも帰ることが叶わない仙鶴の姿を描いている。白居易にとって鶴は仙境を離れた仙鶴である。

これを朝綱の「帰臯(臯に帰る)」の語に照らすと、「帰臯」を願う鶴と、仙鶴とが相い似ている。辞表を上る者が退隱したいと願うその願いと、仙鶴が故郷の仙境に帰りたいと願うその願いとは、俗世から離れることを願うという点で志向する所は近い。「帰臯之望」は、一方で『毛詩』「鶴鳴」に抛りつつ、他方では、故郷の仙境に帰りたいと願う仙鶴の造型に支えられてもいる。白居易は「籠鶴」(『百日仮滿』248)に自分自身を重ねていた。この詩は、白居易五十五歳、眼病肺疾のせいであった百日の休暇が終わるとき、退官の決意を詠んだものである。白居易の「籠鶴」は、辞表の「鶴」が上表者自身を表すのと共通する。辞表の「鶴」の表現には、白居易の「籠鶴」の発想も、影響を与えている。

第四章。『竹取物語』において、かぐや姫の帰還先を示すために用いられた「月の都」は、漢語「月宮」を前提として成ったもの。『源氏物語』須磨巻の光源氏の歌、手習巻の浮舟の歌に見える「月の都」にもまた漢語「月宮」の語の投影を見るべきだろう。平安朝の漢詩文における「月宮」の用例は四例。『源氏物語』以前の例及びこれらが受容したと思われる白居易・劉禹錫の詩句を見るに、「月宮」の語は、姮娥と強く結びついている。姮娥の名は、総集では『文華秀麗集』以降に見出され、艶情士・閨怨詩に代表される女性の孤独や寂しさを詠む詩に用いられる傾向が顕著である。

『白氏文集』に妓女の舞を天女の霓裳羽衣の舞に喩え、それを神女か月中の仙かと評する詩がある。「酔後題李馬二妓」0906に「行くゆく雲髻花鈿の節を揺らし、応に霓裳の管絃を趁ふに似たるべし。……疑ふらくは是れ面般心未だ決せず、雨中の神女か月中の仙か」という。酔った後に李氏馬氏二人の妓女の艶麗なさまを詠んだ詩。「雲髻花鈿」は、「長恨歌」において、楊貴妃が亡くなった時の模様を表した「花鈿委地無人收」、仙界の貴妃の姿を表す「雲鬢半偏新睡覺」、さらに貴妃の言葉「但教心似金鈿堅」等の句を連想させる。『白氏文集』伝来以後、月宮・霓裳羽衣・楊貴妃・月中仙が互いに連想の糸でむすばれ、それぞれがそれをたぐり寄せたとの推定が可能。和語「月の都」は、漢語「月宮」のそうした多面性を総体的な形で引き受け、一つの概念に収斂させたも

のだったろう。

「第七章 楊貴妃譚の変容」。玄宗・楊貴妃・安祿山をめぐる物語（＝楊貴妃譚）の創作活動において中心的な役割を果たしたのは、「長恨歌」と「長恨歌伝」である。『平家物語』も、楊貴妃譚に依拠する表現や説話を多く内包する。中でも注目されるのは、延慶本平家物語・第三末「大伯昂星事付楊貴妃被失事并役行者事」に「長恨歌」及び「長恨歌伝」を典拠として引かれる長文の楊貴妃譚である。この説話は、その結構や表現など、多くを「長恨歌」「長恨歌伝」に依拠している。だが、前半より後半が引用の度合いがはるかに高い。

「楊貴妃被失事」は、『和漢朗詠集』の摘句「楊貴妃帰唐帝思、李夫人去漢皇情」250の古注釈の一節に基づいていると思われる。国会図書館本『和漢朗詠注』には、「楊貴妃被失事」の後半部分（方士の登場や蓬萊への訪問）がない。朗詠注に前半の記述はあるが、それ以降はない。だから、後半については「長恨歌伝」に拠ることになったのだろう。

「楊貴妃被失事」の作り手は、説話の大枠を朗詠注に拠る一方で、貴妃が殺害される場面については、「長恨歌伝」の記述を参照し、安祿山が楊貴妃を殺したという朗詠注の内容を改めた。諷諭詩の「驪宮高」も典拠の一つである。

吉原浩人「高階積善勸学会詩序考——白居易詩文と天台教学の受容——」（高松寿夫・雫雪艶編『日本古代文学と白居易——王朝文学の生成と東アジア文化交流——』、勉誠出版、二〇一〇・三）。

この詩序は、康保元年（九六四）に源為憲・慶滋保胤らによって創設された勸学会が、廃絶した後に再興された時の作品で『本朝文粹』巻十・『本朝麗藻』巻下に収載されている。高階積善は、勸学会創設当時の結衆であつたため、その廃絶を惜しみ、藤原道長の外護を仰いで、十九年ぶりに復興させた。詩序の撰述年は寛弘元年（一〇〇四）前後と考えられている。（一 はじめに）。章立ては以下の通り。「一 高階積善の勸学会詩序訳註」

「三 第一段…勸学会の廃絶と復興・白居易詩文の受容」「四 第二段…破題の方法」「五 第三段…九月十五日の盛会」「六 藤原有国の勸学会詩」「七 『江談抄』の摘句」「八 結語」。

三章。「天台山下」と、比叡山を中国の天台山に擬しているが、この句で用いられる「詩境」「徒為」「望雲」「故郷」は、いずれも白居易や『千載佳句』に見える語である。積善が、慶滋保胤らが確立した白居易詩文撰取の伝統を受け継いでいることは明らかである。「方今」以下では、現状を打破するため、勸学会復活を試みるさまを描写する。ここで「方今」「値」「適遇」「議以」……「日月」は、みな白居易の詩文に見いだせる語である。積善は、本詩序において意識的に白詩語を多用している。「暹有盛衰」は、白居易「一葉落」2198の「寒温与盛衰、通相為表裏」を踏まえている。

五章。情景描写の緊句「清景難遇、佳期可知」は白居易「效陶潜体詩十六首、其七」0219。「八月十五日夜同諸客翫月」3182を踏まえる。

「八 結語」。これまでに慶滋保胤の詩序を詳細に検討してきた。これに高階積善の詩序とその折の句題詩を分析した結果、以下の事が明らかになった。第一、勸学会で詠じられた詩文は、『法華経』ならびに天台教学を踏まえている。第二、白居易詩文の語彙を、勸学会の詩序や詩の中になるべく多く使用するという規則があつた。これを徹底したのが慶滋保胤であり、紀齊名はややゆるやかだが、高階積善は白詩語を積極的に使用している。そもそも勸学会そのものが白居易の仏教信仰を基礎に、その行業をなごるために創始されたものである。しかし、これを一字一句つきあわせて点検することは、従来行われていなかった。今後は、詩序以外の撰関期の勸学会関連作品や、院政期の勸学会詩文について、仔細に検討することで、さらに勸学会の全体像を浮かび上がらせたい。

吉原浩人「紀齊名勸学会詩序考——白居易の仏教思想と十五日開筵の意義——」（水門）二二、二〇一〇・四）。

紀齊名の勸学会詩序は、同時代あるいは後世に高く評価されていたが、作品全体の分析は行われたことがない。

本稿は紀齊名の勸学会詩「七言暮春勸学会聽講法華經同賦撰念山林」の詩序について検討する。(二一 はじめに) 章立ては以下の通り。「二 詩序の本文」、「三 第一段・法華經講説の意義」、「四 第二段・破題の方法」、「五 第三段・仏道への希求」、「六 天台教学の受容」、「七 勸学会十五日開筵と『涅槃經』」、「八 白居易と勸学会詩序」、「九 慶滋保胤の摘句」、「十 後世への影響」、「十一 結語」。

二章には本文を掲げる。文章構造・訓読・現代語訳・註釈は、別稿「紀齊名勸学会詩序訳註」(早稲田大学大学院文学研究科紀要 第五五輯第一分冊、二〇〇三・五)として公表。

「十一 結語」にいう。白居易晩年の信仰は、浄土信仰を基軸としており、法華經にも詳しいものだった。勸学会はそういう白居易の仏教信仰に基づき、北堂の学生たちが、その行業をなごるため始められた。その期日は、仏の円満な悟りの象徴である満月の日に設定された。それゆえ、勸学会において賦される詩文には、『法華經』とその注釈書、浄土經典、『涅槃經』、そして白居易の作品から、なるべく多くの語彙を選ぶという作文上の規範あるいは合意があった。ただし紀齊名は慶滋保胤ほど白居易絶対主義ではなく、『千載佳句』などにある白居易以外の詩語をも利用している。『江談抄』で、大江匡房は、紀齊名の詩序が慶滋保胤や大江以言のそれよりも優れていると語っていた。^{*} 本詩序を精読して、その評言が正鵠を得たものであると実感する。それは「撰念山林」という詩題を、さまざまに変奏させる圧倒的な力である。この作品は、勸学会関連の詩文中、最高峰に位置づけられるべきものである。

^{*} 『江談抄』巻六(三九)「齊名の「念ひを山林に撰む」の序の秀逸なる事」に、「齊名の「念ひを山林に撰む」の序は秀逸なるものなり。保胤の「沙を聚めて仏塔を為る」は敵るべからず。以言の数度の勸学会もまたもって敵らず」と。

吉原浩人「大江以言擬勸学会詩序考——『法華經』の受容と白居易——」(『東洋の思想と宗教』二八、二〇一・三)。

大江以言(九五五〜一〇一〇)は、永観元年(九八三)ごろ、伊豫掾となつて任地に下つた。本稿で論じるのは、

以言が伊豫国楠本の道場で、勸学会に擬えて修した法会の詩序である。勸学会は、源為憲の『三宝絵』によれば康保元年(九六四)三月に、比叡山麓西坂本において初めて行われた。以言は勸学会に天元元年(九七八)頃参加したと推定されている。以言は下向地の伊豫において、同日同時刻に勸学会を修している。(二一 はじめに)^{*}

^{*} 以言と勸学会のことは、後藤昭雄「大江以言考」(『平安文学研究』四八、一九七二・六)、『平安朝漢文学論考』(桜楓社、一九八一・九)・同補訂版「勉誠出版、二〇〇五・二」に収録「に拠る」。

章立ては以下の通り。「二 詩序の本文」、「三 第一段・豫州における擬勸学会の意義」、「四 第二段・破題の方法」、「五 第三段・良医の喩え」、「六 白居易詩文の受容」、「七 以言独自の用語と後世の評価」、「八 結語」。

二章。『本朝文粹』巻十の、大江以言「九月十五日於豫州楠本道場擬勸学会聽講法華經同賦寿命不可量」詩序の全文を挙げる。文章構造・訓読・現代語訳・註釈については別稿「大江以言擬勸学会詩序訳註」(早稲田大学大学院文学研究科紀要 第五六輯第一分冊、二〇一・二)として公表。

六章。本作は都から遠く離れた地で草されたもので、出典は大江以言の他の作品のように多彩ではない。しかし、『白氏文集』は伊豫に持参していたと思われ、他の勸学会作品同様、白居易詩文の語句を多用している。例えば、第三段に「松房・竹戸、雖恨無先達・見修之僧」という、「松房」の語は、白詩「正月十五日夜東林寺学禪、偶懷藍田楊主簿、因呈智禪師」981に「松房是我坐禪時」と見える。第一段に「故今境内尋寺、寺中逢僧」というのは、白詩「中書夜直、夢忠州」1223の「覓花來渡口、尋寺到山頭」と、「夜題玉泉寺」2777の「遇客多言愛山水、逢僧盡道獸羶塵」に拠る。「時哉時哉」は、『論語』郷党篇にあるが、白居易も「凡渭賦并序」で「曰豫生之年兮、時哉時哉」と使用している。「惟新」は『尚書』や『詩經』『文選』にもあるが、白居易も「君子不器賦」1421で「肉弘道而惟新、外濟用而可久」などと述べる。以言は、これらを二重三重に参照しているように思う。

柳井滋は本作を「経を素材として、ただ美しい文章を作ろうとしていたと言っても過言ではないであろう」と

評している。^{*}この言は本作の一面を言い当ててはいるが、全てではない。美しい文章を作ること、四六駢儷文の本質であり、それは同時代の文章道出身者が必ず目指した道である。問題はそれを仏事である勸学会に援用することの可否である。勸学会の作者たちは、職業を忠実に果たすことが、狂言綺語の罪を犯すことに直結することの自己矛盾に懊悩していた。それを解消してくれたのが、文学と信仰の矛盾を止揚した白居易の仏教に対する態度なのである。

* 柳井滋「経句題の詩について——勸学会における釈教詩(続)——」(「紀要」八、共立女子大学短期大学部、一九六四・二二)の(三二)。

吉原浩人「神として祀られる白居易——平安朝文人貴族の精神的基盤——」(河野貴美子・張哲俊編『東アジア世界と中国文化——文学・思想にみる伝播と再創——』、勉誠出版、二〇二二・二)

白居易の、諷諭・閑適・風景・恋愛詩などの永享、日本漢文学や和歌文学への影響についての研究は数多くあるが、思想・宗教的側面からの研究は、「狂言綺語」観を除いてほとんどなされていない。本稿では宗教信仰の側面から、平安時代、白居易がどのように祀られたのか、なぜそのような現象が起きたのかについて闡明する。近年、「勸学会に集う文人貴族と白居易詩文の関係について研究を進めているが、本稿はそれに連なるものである。(はじめに) 章立ては以下の通り。「一 神・菩薩としての白居易」「二 白居易讃仰の文学」「三 白居易祭文」「四 尚歯会の白楽天画像」「五 白居易を描いた屏風絵」「おわりに」。

「おわりに」にいう。白居易は平安時代の人々に、なぜこのように重視されたのか。宗教と文学の関係に絞って、改めて述べておく。

平安朝の貴族たち、特に文章道出身の文人官僚は、なぜ白居易をここまで追慕するのか。詩や文章を創作するには、膨大なエネルギーが必要である。しかし、平仄や対偶などの煩瑣な四六駢儷文の規則の中で、先人の詩文

や故事をちりばめ、自己を表現しようとすることは、仏道に帰依する立場からは虚言を弄することに他ならない。それが「狂言綺語」である。文章道出身者にとって、それは自己否定に繋がる。そこで白居易「香山寺白氏洛中集記」3608の「我有本願、願以今生世俗文字之業、狂言綺語之過、転為将来世世讚仏乘之因、転宝輪之縁也」という文言が金科玉条となる。この白居易の言辞を媒介に、仏典の勝れた教えを敷衍することによって、自らの文学的営為を正当化することができるのである。白居易を神や菩薩の化身として祀り、尊崇することは、平安朝文人貴族の精神的基盤だった。

柳川響「藤原忠通の句題詩とその背景——保延五年六月四日の作文会を中心に——」(「同志社国文学」九三、二〇二〇・一一)。

「はじめに」にいう。本稿では『台記』^{*}保延五年六月四日条に見える忠通主催の作文会の記録を取り上げ、これと突きあわせることで忠通の句題詩を、作文会という文芸空間の中で考察したい。

* 「台記」は、宇治左大臣藤原頼長の日記。『字槐記』、『槐記』ともいう。『台記』の名称は、大臣の唐名のひとつ「三台」による。

章立ては以下の通り。「一 保延五年六月四日の作文会について」「二 「看月自忘暑」詩の検討」「三 「花木逢恩賞」詩の検討」「おわりに」。

『台記』保延五年(一一三九)六月四日の記事から、頼長以外には公卿の参加はなく、忠通が儒者を中心とする文人を集めて作文会を主催したこと、春から延期されていた作文会の詩が併せて披露されたこと、忠通の詩句が参加者全員から絶賛されたことなどが分かる。忠通の句題詩を読解して分析することで忠通の作詩の特徴や故事の受容について検討し、さらになぜ腰句(頸聯)よりも胸句(領聯)が優れていると評価されたのかを考察する。以下、「三」の要点を記す。

「花木逢恩賞」は、保延元年六月四日の作文会で胸句が絶賛された詩である。第三句「貴彩慙じず翁子の錦に」の「貴彩」は、牡丹の高貴な輝きを意味する。白詩「牡丹芳」0152に「穠姿貴彩信に奇絶なり、雜卉乱花比方無し」とある。本詩の「貴彩」は、二字で花を表している。「翁子錦」の「翁子」は前漢の朱買臣の字。ここでは朱買臣が故郷に錦を飾った故事を踏まえており、「不慙翁子錦」で「逢恩賞」を表している。この故事を「錦」を用いて表現しているものとしては、『文心雕竜』巻九「時序」、李嶠『百二十詠』の注、白詩「醉後走筆酬劉五主簿長句之贈兼簡張大賈二十四先輩昆季」0584がある。

第四句「華顔還咲上陽紅」の「華顔」は「貴彩」と対になっており、「華顔」は通常、花の如く美しい容貌を意味するが、ここでは桃の花の意で用いている。

さらに第四句の「還咲」に関連して、「笑」や「咲」という語が桃との関わりで用いられている例が、『百二十詠詩注』桃「三六」の頷聯にあり、白詩「勸酒」3684に「松篁薄暮亦棲鳥、桃李無情還笑人」と見える。「上陽紅」は上陽宮の宮女の美しい顔立ちの意。白詩「上陽白髮人」0132に「上陽の人、紅顔闇く老いて白髮新たなり」とあるのに拠る。

頸聯「秦松好爵応余慶、漢柏良材是異功」については、第五句は『史記』始皇本紀や『百二十詠』松「三一」、また白詩「代書詩一百韻寄微之」0608の「既に高科の選に在り、還た好爵の麤に従ふ」等の影響を受けている。第六句は『史記』亀索列伝や『百二十詠』詩の語を撰取している。

胸句（頷聯）と腰句（頸聯）を比較すると、胸句では花の名を明示せずに「花」を表しているのに対して、腰句では松や柏といった木の名前を直接詠みこんでいる。胸句がより複雑で高度な言い換えを行ったところに、胸句の方が評価された一因があるのではないか。

「おわりに」。本稿では、忠通の句題詩を二首読み解いた。いずれの詩においても肝要部分に白居易の影響が強く見られること、また『百二十詠』や『和漢朗詠集』など幼学書を見ていることが分かった。詩の読解においては原拠の調査にとどまらず、それ以外の幼学書や類書などを精査することも重要である。

三の二六 中世・その他

丹羽博之「日本と中国の梁燕」（大手前大学論集 二〇、二〇二一・三）。

「結び」にいう。日本に於ける「梁燕」は、白詩「燕詩示劉叟」0041の影響を受けて、雛を一途に育てる鳥としての親のイメージが定着し、夙に『菅家文草』に見える。中世になっても「梁燕」は、謡曲「丹後物狂」等に「夜の鶴」「焼け野の雉」とともに、親が子を思う愛の深さの例として登場し、日本漢詩でも『翰林五鳳集』に詠まれている。近代の詩吟集にも白詩の「燕」詩は収録され、詠い継がれた。おそらくその詩吟集から、大戦中の学徒兵の心をも惹いたと考えられる。

中国に於いては、「梁燕」は『史記』陳涉世家の「燕雀安知鴻鵠之志」等の影響から小人物の譬喩として用いられたり、白居易の新樂府「上陽白髮人」のように夫婦仲の良い鳥として詠まれるが、親鳥の子を育てる深い愛情というイメージの作例は少ない。

四 近世

新井ゆい「尾形光琳筆「扇面貼交手筥」に関する一試論：手筥媒体による画面展開」（学習院大学人文科学論集 二八、二〇一九・一〇）。

「まとめ」にいう。これまで本作を扱った研究では主に扇画面の図様に注目して、制作時期や作者が光琳か否かを検討してきた。本稿では、扇画面が手筥の面に貼られていることにより付与された新たな様式について検討する。

身側に貼られた物語画の「西行図」と「白楽天図」は、それぞれ『西行物語絵巻』と謡曲『白楽天』に基づくもので、共通点が二つある。一、両扇画面に描かれた西行と漁翁が和歌に長けている、また本作は全面に草花の扇画面が周囲に張り巡らされていて、物語の和歌及び大和文化の特徴を強めている。二、両図とも旅路を行く場面である。「西行図」と「富岳図」は『西行物語絵巻』及び富士見西行を想起させるように貼られ、「白楽天図」と「雲龍図」は謡曲『白楽天』の物語展開を鑑賞者に想起させるように貼られている。両図は、外側面から内の懸子にかけて箱を開くことで、物語展開を楽しめる趣向になっている。また富士見西行や、富士越龍などの定型画題は、狩野派以外の絵師による作品で、江戸の後期になってから普及している点から、扇画面を手筈に貼った時期は江戸の弘化期以降だと考える。

近世の絵画や工芸と比較するに、本作は扇画面主題の蒔絵手筈や、扇面貼交屏風、茶通箱と造形の類似点が見られる。扇と比較するに、二つのモチーフを組み合わせた定型画面を扇の表裏に分割して表現する方法は、一八世紀末に主流になっており、扇画面を手筈に貼った時期は、江戸後期以降の可能性がある。

王欣「恋愛譚における唐風好み考」『諸道聴耳世間狙』四之巻三と『竹取物語』を中心に」（『嘉悦大学研究論集』六二二、二〇二〇・三）。

「おわりに」にいう。上田秋成『諸道聴耳世間狙』四之巻三の恋愛譚「公界はすでに三年の喪服」では、浄瑠璃『新うすゆき物語』の男女主人公二人で一つの歌を完成させる趣向のみならず、『江談抄』第四（七）の都みやこの在中の詩と女房の和歌、謡曲『白楽天』の白楽天の詩と漁翁（住吉明神）の和歌と関連する詩の合唱という趣向も、『竹取物語』の展開と融合された。さらにこの恋愛譚では、女性が詩を作り、男性が和歌を作るという設定が施されたため、人々の通念及び遊廓の規則に反しながらも恋愛を展開する、滑稽な唐土大夫もろこしたゆうと住屋吉介よしすけの人物像が浮き彫りになる。

その上、物語の最後では、『竹取物語』のかぐや姫とちがい、唐土大夫が病気になった住屋吉介を残し、一人で家出をしたという恋の終わり方によって、遊廓の作法を無視した唐土大夫と住屋吉介との恋愛の失敗があらわになったのである。

その『江談抄』及び謡曲『白楽天』に載る詩に関わる部分についての、筆者の論の概要は以下の通り。

この話では、住屋吉介が唐音が読めないため、唐土大夫は、唐音で付けた下の句とともに、「青苔匪衣岩猶寒、白雲似帶山不纏」という詩を贈り出す。この詩によって、住屋吉介の恋心は、唐土大夫に拒否された。しかし、住屋吉介は諦めずに、唐土大夫の詩を和訳し、「苔衣きたるいはほはかたくともきぬへ山の帯は解なん」という恋歌を唐土大夫に贈る。「青苔匪衣……」の句について、森山重雄『上田秋成初期浮世絵草子評釈』（図書刊行会、一九七七、一四二―四三頁）は、この詩と『江談抄』第四の都在中の詩、謡曲『白楽天』の詩との関連性を指摘し、同時にこの詩が『日本詩記』都在中の詩「白雲似帶圍山腰、青苔如衣負巖背」を逆にし、さらに否定形にしたものと解釈している。注目すべきは、『江談抄』では、都在中の詩とともに、女房の和歌「こけ衣着たる巖はまびろけて衣着ぬ山の帯するはなぞ」が並べられていることである。

『江談抄』第四の註釈によれば、この都在中の詩と女房の和歌の組み合わせは、漢詩と和歌との合唱である。その上、都在中の詩と女房の和歌を受容した謡曲『白楽天』では、白楽天と漁翁（住吉明神）が詩と和歌を作る場面が見られる。

ワキ「いや其義にてはなし、いでさらば目前の気色を詩に作って聞せう、青苔衣を帯びて、巖の肩に懸かり、白雲帯に似て山の腰を囲る、心得たるか漁翁 シテ「青苔とは青き苔の、巖の肩に懸かれるが、衣に似たると候な、白雲帯に似て山の腰を囲る、面白し面白し、日本の歌もただ是候よ、苔衣着たる岩ほはさもなく、衣着ぬ山の帯をするかな。」

『世間狙』四之卷三のこの部分の唐士大夫の詩、住屋吉介の和歌を、『江談抄』の都在中の詩、女房の和歌、及び謡曲『白楽天』の白楽天の詩、住吉明神の和歌と比べると、『世間狙』の詩は、『江談抄』の都在中の詩、謡曲『白楽天』の白楽天の詩を否定形にしたものである。また『世間狙』の和歌は『江談抄』の女房の和歌、謡曲『白楽天』の住吉明神の和歌の上の句、下の句の最後の五文字を変えたものである。^{*}こうした各句の最後の部分を変更することにより、『江談抄』と謡曲『白楽天』の景色を描写する詩と和歌は、『世間狙』四之卷三では、巧妙に男女の恋心を描く詩と和歌に変容されたのである。

^{*}上句・下句の最後の五文字の変化は以下の通り。「まびろけて」「するはなぞ」(江談抄)、「さもなくて」「をすかな」(白楽天) ↓ 「かたくとも」「は解なん」(世間狙)。

六 現代

丹羽博之「軍歌と漢詩(其二)」(大手前大学人文科学部論集「一、二〇〇〇」)。

前言に言う。祖母から寝物語に「戦友」「水師營の会見」等を聞いて育った。「軍律厳しき中なれどこれが見捨てておかりようか」「赤い夕日の満州に友の塚穴掘ろうとは」「庭に一本なつめの木」などの歌詩は戦争の悲惨さとともに幼な心に焼き付いた。ふとしたおりに聞く軍歌の歌詩をよくよく見ると、漢詩の表現を利用している箇所が多くあることに気づいた。本稿では、軍歌の表現と漢詩について考察する。章立ては以下の通り。「一 波蘭懷古と越中懷古」、「二 四海兄弟」、「三 巡航節と山男の歌と常磐炭坑節」。

「一 波蘭懷古と越中懷古」で白居易の影響に触れている。「波蘭」はポーランドの意で、「波蘭懷古」は落合直文の作詞。この五番に「照らす夕日に色さえて 飛ぶも淋しき鷓鴣の影」と「鷓鴣」が出ている。

鷓鴣はポーランドにはいないはず。それが「波瀾懷古」に詠まれているのは李白の「越中懷古」に「宮女花の如く春殿に満つ、只今惟だ鷓鴣の飛ぶ有り」とあるのに拠る。この李白の詩により鷓鴣は亡国荒廢の象徴とイメージされるようになった。白楽天も「長洲苑」1203において、「春は長洲に入りて艸又た生じ、鷓鴣飛び起ちて人の行くこと少なし」と鷓鴣を詠んでいる。

丹羽博之「軍歌と漢詩(其二)——付、学徒兵の手紙と白楽天の詩——」(大手前大学人文科学部論集「二、二〇〇二」)。
前言にいう。軍歌を知っている世代が急速に減りつつあることを考え、今書いておかないとの思いで筆を取る。明治時代における漢文学の影響の紹介、文化史考察の一助になれば幸いである。章立ては以下の通り。「一 勇敢なる水兵」「二 婦人従軍歌」「三 ノルマントン号の歌」「四 独立守備隊・朝鮮国境守備隊の歌」「五 学徒兵の手紙と白楽天の詩」。

白居易に関連する箇所を記す。

一章。「勇敢なる水兵」一番の「煙りも見えず雲もなく 風もおこらず波たたず」と否定を重ねる表現は、白楽天の詩「嘉陵有懷二首」其二に「明ならず闇ならず朧朧たる月、暖に非ず寒に非ず慢慢たる風」等を始め、漢詩に多く見える。「風もおこらず波たたず」に続く「鏡のごとき黄海」も白詩「看採菱」2850「菱池鏡の如く浄くして波無し、白点花稀れに青くして角多し」等が背景にある。

三章。「ノルマントン号の歌」は、ノルマントン号事件^{*}に対する怒りを唱ったもの。五九番まである長い歌詞だが、その三九番は「軍艦大砲ありとても、わが国民は知識なく、国が実に弱くとも、鳥や豚ではあるべきか」と、明らかに非のある船長に刑罰が科せられない怒りを表現している。鳥(鷓)はともかく豚は当時の日本人には馴染みが薄いものだったろう。それがここで「鳥(鷓)」と「豚」とが出てくるのは、漢文の世界では「鷓豚」といえば家畜の代表だからである。例えば、白詩「春村」0706に「牛馬風に囚りて遠く、鷓豚社を過ぎて稀な

り」とあり、陸游「遊山西村」に「笑う莫かれ農家臘酒渾れるを、豊年客を留むるに鶏豚足れり」等とある。ふとした語句の中にも漢語が使われるところに明治前期の人々の漢文の素養の高さを窺わせる。

*ノルマントン号事件とは、不平等条約下における英国貨物船の邦人乗客遭難をめぐる紛争事件。明治一九年一〇月二三日、横浜を出港、神戸に向かったマダムソンベル汽船会社所有のノルマントン号二四〇トンは、航行途中暴風雨に遇い、同月二四日午後八時頃、三重県四日市より和歌山県樫野崎までの沖合で難破、沈没した。その際、船長ドレークをはじめ乗組員のイギリス人・ドイツ人などは全員ボートで脱出、漂流しているところを沿岸漁村の人々に救助され手厚い保護を受けた(三人凍死、上陸後埋葬)。ところが、日本人船客二五名は一人も避難できた者はなく、船中に取り残されたことごとく水死した。(中略)国内世論も船長以下乗組員の日本人船客にとつた非人道的行為に対し、大いに沸騰した。……(『国史大辞典』)。

五章。『雲ながるる果てに』の中に、「燕の詩に思う」という一文がある。真鍋信次郎(九州専門学校 福岡県 三期飛行予備学生 二十年五月二十五日 南西諸島にて戦死 二十二歳)の書いた手紙。「……散るべき時にはにつこりと散る。だが生きねばならぬ時は石にかじりついても生きぬく。これがほんとうの日本男子だと思います。御安心ください。……白楽天の「燕の詩」、梁上双燕あり 翩翩たり雄と雌と、泥を銜む両椽の間 一巢四児を生ず……。以上のごとく彼等の子を思う心、まして我々の両親の我々をいつくしみそだてられた恩の大きさにおいては非常に大なるものと思う。……姉上様」。白詩の「燕詩示劉叟」^[004]を引用して、姉に父母の愛情の深さを訴えている。ところが白詩の意図は必ずしもそうではない。題下に「叟に愛子有り、叟に背きて逃げ去る。叟甚だ之を悲念す。叟も少年の時、亦た嘗て是の如し。故に燕の詩を作りて以て之を諭す」と注している。前半に長々と雛を育てることを述べたのは、結末のどんでん返しの効果を高めるための伏線である。まじめな真鍋さんは前半の親燕が心こめて雛を育てる描写ばかりに心を奪われたようだ。家族への手紙の中にも白詩を引用するところに、戦前の高等教育、漢文教育の水準の高さがしのばれる。